

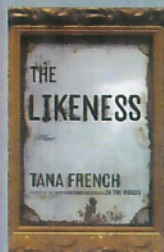
2008年 Amazon.com 第1位!!の「^{すご}凄ミス」です。

エディターズ・チョイス ミステリー部門

錚々たる作家陣を押さえ込んだ実力

アマゾンUSが行ったランキングで、「08年度エディターが選んだミステリー No.1本」がこの『道化の館(原題/ THE LIKENESS)』。デビュー作『悪意の森(原題/ IN THE WOODS)』で話題をさらった著者の確かな成長が、目に見えてわかるようだ。また、イギリスではなくアメリカのランキングでの高評価にも、タナのボーダーレスな人気がうかがえる。ちなみにこの時のベストテンは以下のとおり。

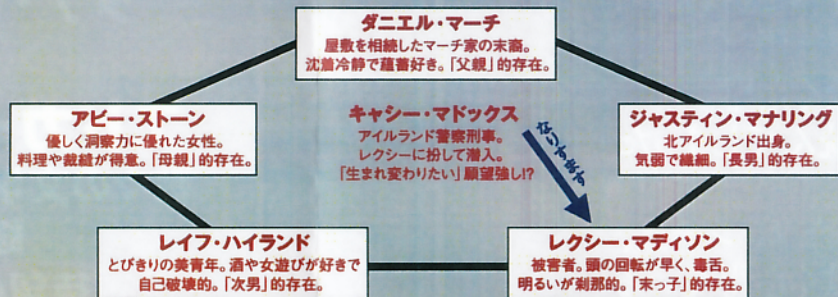
- 1位 道化の館/タナ・フレンチ
- 2位 悪霊の島/スティーヴン・キング
- 3位 THE BODIES LEFT BEHIND/ジェフリー・ディーヴァー
- 4位 ビューティー・キラー2 犠牲/チェルシー・ケイン
- 5位 ミレニアム1 ドラゴン・タトゥーの女/ステイグ・ラーソン
- 6位 心理検死官ジョー・ベケット/メグ・ガーディナー
- 7位 THE FIFTH FLOOR/Michael T. Harvey
- 8位 THE BLACK TOWER/ルイス・ペイヤード
- 9位 THE COLD SPOT/Tom Piccirilli
- 10位 BLACKMAN'S COFFIN/Mark de Castrique



(US版)

日本にもいる、“社会に馴染めない若者たち”

ホワイトソーン館に住む大学院生は、一風変わったインテリ集団だ。キャンパス内でも浮いた存在。コミュニケーションが苦手、家庭の愛に飢えた彼らは、似た者どうしで結束し、彼らだけの世界を築いている。でも、これは何も特異なことではないのかもしれない。オタクやひきこもり……日本でも思い当たることが少なからずある。そんな“社会に馴染めない若者たち”を描いた本作は、国境を越えて現代を映し出す鏡みたいで胸に迫る。疑似家族のように暮らすホワイトソーン館の住人をご紹介します。



アイルランドという舞台をフルに生かしたストーリー

前作『悪意の森』ではダブリン郊外の鬱蒼とした森の空気を余すことなく描いていたタナ・フレンチ。今回もまたアイルランドが舞台だからこそ要素が、物語全体に深く関わっている。自然と、アイルランドの“お勉強”にもなるから、面白い。例えば:



◆ 荒れ果てた小屋

遺体発見現場。19世紀中盤からはじまった飢饉で多くの人々が故国を離れ、アメリカなどに渡った。その結果、このような廃屋がアイルランド各地に残されている。物語中では、アイルランド人にとっては見慣れた廃屋に被害者レクシーが大きな関心を示していたことから、彼女は外国の出身なのではないかと推測される場面も登場する。

◆ 中絶は海外で

ホワイトソーン館の忌まわしい歴史の中に、村の娘を妊娠させてしまった屋敷の男の話がある。中絶を禁じたカトリックが主たるアイルランドでは、不本意な妊娠はトラブル以外の何ものでもなかった。お金のあまるものは隣国イギリスに渡ってこっそり墮胎をしたが、そうでなければ妊娠した女性は修道院送り。生まれた子は当然、里子に出されてしまっていた。本作でも「妊娠」は一つのキーとなっている。

◆ 支配した者とされた者

700年以上にわたりイギリスの支配を受けてきたアイルランド。独立後も、北アイルランドはまだイギリスの一部だし、いまもアイルランド人とイギリス人には計り知れない溝があるともいう。ホワイトソーン館はかつての支配階級だったマーチ一族の屋敷。そこに暮らす男性陣はみんな、イギリス系アイルランド人でもある。地元住民との確執は、この物語の中核を成す要素の一つ。憎しみの歴史は、簡単に埋めることができないのだと改めて思い知らされて、切なくなる。



多国籍な作者のマルチな視点が生み出すもの



著者タナ・フレンチ(Tana French)はアイルランドのダブリン在住。しかし「父親が銀行員だった関係で世界中で暮らしたわ。7歳の時にはすでに、3大陸を制覇していた(笑)」というように、アイルランド、イタリア、アメリカ合衆国、マラウイ共和国(アフリカ)で生活をしている。1990年以降はアイルランドに移り、以降、ダブリンのトリニティー大学で演劇を学ぶ。海外生活から身につけた視野の広さは「ダブリン市民が当たり前のように流してしまうようなことにも気づくことができる」といい、それが小説を書くのにも役立っているという。本作に登場するキャラクターらのリアル感あふれるアウトサイダー的な要素は、そんな彼女のマルチな視点が生み出しているのかもしれない。